

正倉範囲から発見した遺構

今年度の調査成果によって正倉跡の範囲が確定しましたが、この範囲からは正倉（税として集めた米を保管する倉庫）とみられる遺構が複数見つっています。

昨年度調査では正倉跡の中心建物となる大型礎石建物^{そせき}が 1 棟確認されています。東西 7 間 (16.8m)、南北 3 間 (7.2m) を測るこの建物は礎石建瓦葺^{かわらぶき}の正倉としては県内唯一の発見例であり、多胡郡正倉の中で最も格の高いシンボリックな建物（法倉）と考えられます。豪壮な瓦葺の正倉は全国的にも珍しく、多胡郡建郡の政治性を強く物語ります。

このほか、礎石建ちの正倉が 1 棟と、礎石が残っていないものの、瓦の出土状況などから正倉と確定される遺構が複数確認されています。往時は周囲を溝で囲われた中に瓦葺の倉庫群が立ち並ぶ壮観な姿であったことが想定できます。

多胡郡正倉跡と多胡碑の位置

多胡碑から真南に引いたラインは、正倉跡のほぼ中央を貫いており、多胡碑から正倉跡北辺区画溝までの距離は約 350m です。

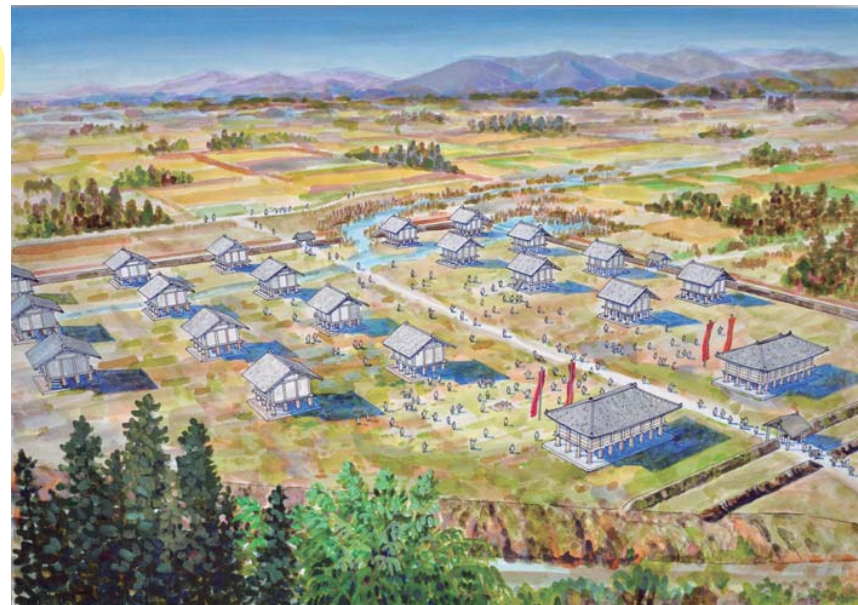
多胡碑は、古代多胡郡が和銅 4 年（西暦 711 年）に新たに成立したことを記した我が国唯一の建郡碑です。一方、多胡郡正倉跡は、古代多胡郡衙（奈良時代における地方行政機関）の中心施設です。

両者は位置関係から、計画的に配置された可能性があります。また、多胡碑に刻まれた建郡の年代と発掘調査の結果確認された正倉の瓦の年代は、おおよそ一致しています。

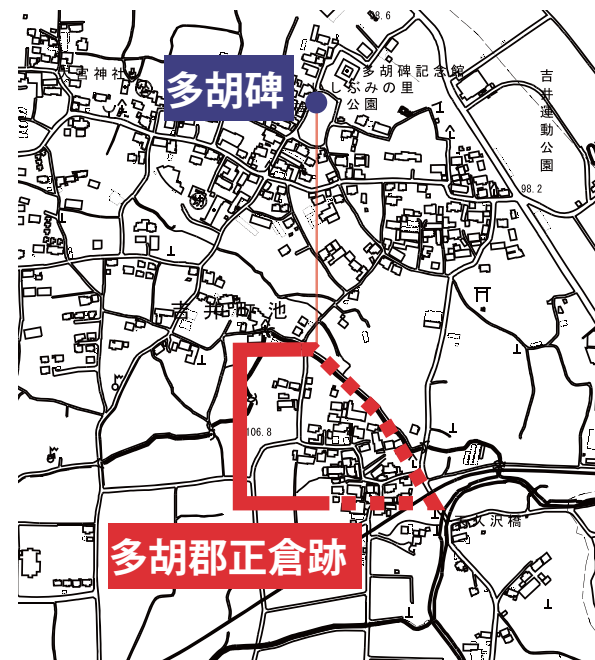
遺跡の価値と保存について

この遺跡は、建郡の経緯を記した在地の資料（＝多胡碑）が現存する全国で唯一の郡衙正倉として、本邦古代史研究に欠かせない遺跡であり、多胡碑の真正性を考古学的側面から補強するものです。現在、多胡碑を含む上野三碑についてユネスコ「世界の記憶」への登録を申請中ですが、その価値付けをいっそう高めるものです。

高崎市としては今後も多胡郡正倉跡の調査を継続するとともに、保存をより確実なものとするため国指定を目指していきます。



多胡郡正倉跡 想像画（北東より望む）



正倉跡の範囲が確定！ 多胡郡正倉跡 第 6 次調査（平成 28 年度） 現地説明会 資料

多胡碑周辺遺跡の発掘調査は、今年度で 6 年目になります。昨年度、古代の郡役所の一部である正倉跡^{しょうそう}として認定され、多胡郡正倉跡と名づけられました。

今年度の調査では正倉跡の北辺にあたる区画溝を発見し、あわせて通路となる土橋^{どばし}を発見しました。

この北辺区画溝と、過去の調査で確認した西辺および南辺の区画溝によって、正倉跡の周囲が溝で囲われていたことがわかり、北東の段丘崖とあわせて多胡郡正倉跡の範囲を確定することができました。

このことをふまえ、多胡碑周辺遺跡調査検討委員会の指導のもと、高崎市として遺跡を保存し、国指定を目指すこととなりました。



64T 北辺区画溝（白線内側）と土橋（写真中央）南から



北辺区画溝 (64T) 今年度調査 (西から)



北辺区画溝 断面 今年度調査 (西から)

北辺区画溝は、正倉跡の北西に位置する64Tで見つかりました。幅約2m、深さ約80cmで断面の形状は逆台形をしています。途中で掘り残されている部分もあり、これは正倉跡の出入口として使用された土橋と考えられます。土橋の幅は現況で約3.5mです。

この溝を埋めている土の中位からは奈良時代の瓦が出土し、最上層には浅間B軽石(1108年:平安時代降下)の混じった土があることから、この溝は奈良時代に作られ、平安時代末ごろに埋まったと考えられます。同様の溝は、63Tでも確認しました。



西辺区画溝 平成 25 年度調査 (南西から)



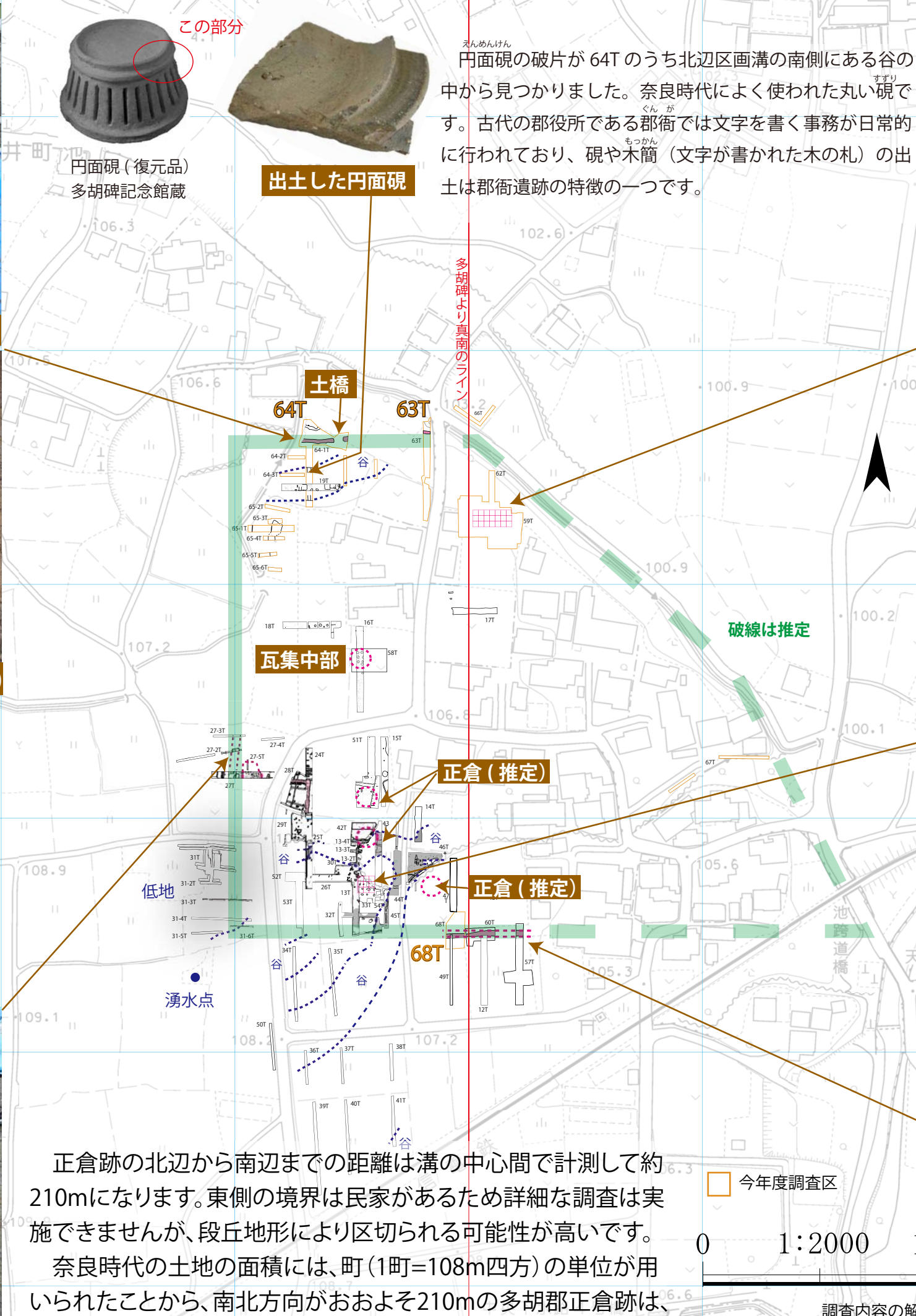
円面硯 (復元品)
多胡碑記念館蔵

この部分



出土した円面硯

円面硯の破片が 64T のうち北辺区画溝の南側にある谷の中から見つかりました。奈良時代によく使われた丸い硯です。古代の郡役所である郡衙では文字を書く事務が日常的に行われており、硯や木簡(文字が書かれた木の札)の出土は郡衙遺跡の特徴の一つです。



正倉跡の北辺から南辺までの距離は溝の中心間で計測して約210mになります。東側の境界は民家があるため詳細な調査は実施できませんが、段丘地形により区切られる可能性が高いです。奈良時代の土地の面積には、町(1町=108m四方)の単位が用いられたことから、南北方向がおよそ210mの多胡郡正倉跡は、方2町(1辺約216m)を意識して設計されたと想定できます。



調査内容の解釈については、今後の調査や検討によって変わる場合があります。



大型礎石建物 (法倉) 平成 27 年度調査 (西から)



正倉 平成 25 年度調査 (南から)



南辺区画溝 (68T) 今年度調査 (西から)

27年度調査区の西側で確認しました。さらに溝が延長していることがわかりました。